

本校教官の意見発表に対する防衛大学校長所感

本年6月30日付で集英社オンラインにおいて、本校所属の等松春夫教授のインタビュー記事(防衛大現役教授が実名告発:自殺未遂、脱走、不審火、新入生をカモにした賭博事件-改革急務の危機に瀕する防衛大学校の歪んだ教育)および教授のより長い論考(危機に瀕する防衛大学校の教育)が発表されました。

本校にとって重要な事案であり、看過することは適当でないと考えますので、学校を代表する者として、少しばかり発言させていただきたいと思います。ただし、多数の論点に逐一反論する時間はありませんので、主要な論点に絞りたいと思います。

[公表に至るまでの経緯]

本件においては、部外意見発表手続きの一環として、事前に草稿をいただいていた。その内容について、若干事実について異なる部分など指摘させていただきましたが、内局とも十分協議した上で、部外意見発表についての事前届け出手続き制の目的は検閲ではないという共通の理解のもとで、そのまま発表された次第です。出版社の集英社編集部からも事実確認等に関して問い合わせがあり、本校は返信しています。

[基本的所感]

ただし、それは、その文章の内容に賛意を示していることを意味するものではありません。もとより教授の防大をよくしたいという気持ちについて異を唱えるつもりはありませんが、全体として極めて遺憾な内容であると感じています。論考の題名は「危機に瀕する防衛大学校の教育」となっていますが、改善の余地はおおいにあるとしても、「危機に瀕する」という表現には違和感を禁じえません。また、議論の少なくとも一部は、事実ではなく推測に基づいていると感じられます。それによってこの論考は本校の名誉を大いに傷つけたと判断しています。具体的あるいは建設的な提言がない点も残念です。

[多数用意されている学校内での意見表明の機会]

元来、防大改革については学校内に複数の経路が用意されていますので、まずはそちらをお試しいただくべきであったと認識しています。教授会もその一つであると認識していますし、業務改善提案も奨励されています。非公式にご連絡いただくこともいつでも可能ですし、何より私はすべての学科と昨年秋以来懇談の機会を持ってきましたので、そちらを活用していただくことも可能であったと考えます。もとより当日ご都合がつかなかったのかもしれませんが、等松教授は参加してくださいませんでした。それでも、学科長にメモを預ける等のことはそれほど難しいことではなかったのではと想像する次第です。

[過去の事例のみで現在を判断することの妥当性]

また、不祥事として例示されている事例には、2013年のものまで含まれ、その他は2019年のものと2020年のコロナ禍での対応についてです。(なお、2022年の自衛隊OBに対する現職幹部自衛官による機密漏洩事件まで含まれていますが、これは防大とは無関係です。)

過去に教官・学生によってあってはならないことが起きたことは事実ですが、一般論としていえるのは、それでもほとんどの教官・学生は真剣に教育・訓練に打ち込み、その結果防大としては優れた幹部自衛官を輩出してきた、ということです。また、不祥事が起きた際には、防大としてはその都度原因を究明し、真摯に反省し、再発防止措置を講じてきました。

過去の事案をもって、それが全部ないし本質であるかのように、さらには現在の防大をも象徴するかのように決めつけられるのは、公正さに欠けるところのある議論であると考えます。

[最近の状況]

等松教授は、「かつて様々な方法で改革を訴えたが、一向に改善はなかった。だから止む無くこの6月に外部に公表する行動に出た」とおっしゃるかもしれません。しかし、これは妥当なご判断でしょうか。

むしろ、ここ1-2年は、防大は深刻なコロナ禍の真ただ中にありながらも、かねてから取り組んできたさまざまな試みが、一定程度成果を生み始めた時期といえるかもしれません。とくにここ1年程度は、それが加速されつつあるようにも思われます。総じて、近年の防大は、幹部自衛官たるべきものとして必要不可欠な訓練や規律は断固求めつつ、学生に対する不必要なストレスはなるべく軽減し、また以前より自由で開かれた学校であることを目指しています。

ご本人は当初認識されていなかったようですが、乾布摩擦は昨年秋に止めていました。学生舎ではコロナ感染拡大期には暫定的に4人部屋を実施しました。本年に入ってから前月に、就寝時に学年別の部屋編成を実施していると聞いています。

本年3月の卒業式には任官辞退者を出席させることにしました。

本年に入ってから、第1学年については入校辞退者数が激減し、また年度当初から2か月間で見れば退校者数も減少しています。同時期、サービス事案も減少しました。重ねて申し上げますが、入校辞退者数、1学年退校者数、そしてサービス事案発生件数とも、コロナに見舞われた3年間と比較して現時点で減ったのみならず、それ以前の3年間の平均値と比較しても減少しています。

むろん、このような減少の原因を客観的に確定するのは容易ではありません。しかし、さまざまな小さな努力の積み重ねが、一定の効果を生んでいると推測することも可能であろうと思われれます。

例えば、昨年 9 月頃から訓練部の指導教官はすべての学生と交換ノートを交わし、学生の率直な意見や心情の把握に努めています。小原台ポストも一定の役割を果たしているようです。学生間指導においても、上級生による強圧的な言動を排除してきました。カッター訓練においても、これまでは新入生は、威圧されながら訓練を受ける 2 年生の姿を見ていましたが、それを改め、むしろ上級生に激励されながら訓練を受けているところを目にするようになりました。本年度に入ってから、自主自律が達成されている中隊では、休日・休養日前日の外出を許可するなどの柔軟な運用をしています。最近私の手元に、1 学年が出身高校に宛てた防大を紹介する文章が届きましたが、そこでは怖れていたあるいは予想していた、いわゆるパワーハラスメントがいかに存在しないかについての言及がきわめて多数あります。

等松教授のご議論は、すでに実施されている多数の新しい試みに目を塞ぎ、古い事例でもって本校の現在を一方的・一面的に規定しようとしている点で、大筋で的外れでないかと感ずる次第です。

教授は、現状を前向きにとらえる文章も含ませながらも、「今後のことは信用できない」との議論をされていますが、これは必死に改善の努力をしているすべての現在の防大関係者に対してのみならず、新しい幹部が赴任すれば「過去の状態に戻ってしまう」と決めつけている点で、今後赴任されるであろう訓練部長や学校長に対しても礼を失した態度ではないかと思料いたします。過去の事案でもって、将来についてまで「有罪」と決めつけるのでしょうか。

[結び]

なお、冒頭で説明させていただきました通り、今回の等松教授の部外意見発表についてはそのまま公表されています。これ自体が、今日の防大が表現の自由を認めていることの証左であり、それを象徴する事案とも言えます。ただし、その自由の行使には大きな責任が伴うということは、あらためてここで申し上げるまでもない当然の前提であると思います。一面的ともいえる表現によって、また憶測や決めつけに基づいて本校のあり方について批判することについては十分慎重であるべきであり、再度、今回のような行動をとられたことは遺憾であると申し添えたいと思います。

以上